

電気鳩

海野十三

青空文庫

あやしい鳩はと

高こういち一とミドリのきようだいは、伝書鳩をかつていました。

もともとこれは、お父さまがかつていらつしやる鳩なのですが、お父さまがある大切なご用で、とおいところへお出かけになつてからは、二人のきようだいが世話をしているのです。

鳩はみんなで十羽いました。半分は金あみをはり、半分は板をうちつけて作つてある鳩きゆうしや舎しやのなかに、かつてあるのです。鳩舎は、お家のうらの丘のうえにおいてありました。鳩は、とても

よくきょうだいになついていました。

そのなごやかな鳩のむれが、どうしたことか、ちかごろなんとなくおちつかないようすです。きょうだいが気をつけていますと、たしかにへんです。ふだんならば、鳩たちは一日中鳩舎のまわりに、なかよく、くうくうとないているのですが、それがときどき、にわかには羽ばたきもあらしく、いつせいに空にまいあがつてさわぎます。はては、お家の屋根につばさをおさめて、おちつかないようすで、あっちへいつたりこつちへきたり、きよろきよろと、下をうかがっているのです。鳩たちはどうしておちつかなくなつたのでしょうか。

その日もゆうがたのことでしたが、鳩たちは空にいりみだれて

大きわぎをはじめました。高一とミドリは、いそいで鳩舎にかけつけました。すると、鳩舎の上には一羽の鳩がのこっていました。

「オヤ、へんな鳩がいるぞ」

「うちの鳩じゃないわ。どこのでしょう」

それは、みなれない鳩でした。

ふつうの伝書鳩なら、ぜんしんは石板色で、首のところに金みどりのぶちがあるのですが、いま鳩舎の上にのこっている鳩は、からだの色が、紺こんじょう青で、そしてつばさのさきには、ふとい金のすじが二本とおっていて、よくみればみるほど、かわった鳩でした。その上その鳩は、まるでつくりもののあしでもつけているように、みように両足をひきずって歩くくせがありました。

「もつとよく見てやろう」

と、高一は鳩舎の方になつかづきました。

そして青い鳩に、ぐつと手をのばしたところ、思いがけなくもゆびさきが、電気にふれたときのようにぴりぴりとしびれました。

「あつ——」

と、高一はおどろいて手をひっこめました。そのとき鳩は羽をふるわせて、急にくるりとむきをかえると、きみのわるい羽ばたきをして、さつと空にまいあがりました。が、そのとびかたのすばやいことといったら、まるで戦闘機が地上から、おおぞらへむかつて、^{ぼうあが}棒上りにのぼるのかわりません。あまりのものすごさに、高一もミドリもあつけにとられて、あやしい鳩の行方^{ゆくえ}をみ

おくっていました。

ちようどそのころ、この村のうんと上空を一だいの大きな飛行機が、あとに三だいのグライダーをひいてとんでいました。それは、こんどあらたにつくられた三百人のりのすごい飛行列車です。あやしい鳩はおそれもなく、その飛行列車にずんずんちかづいてゆきました。おどろいたのは飛行列車の三人の試験操縦士です。

「おや、あの鳩は、ちつともにはげないぜ」

「かわいそうに、いまにはねとばされるぞ」

そういつているうちに、あやしい鳩は弾丸のように、その翼よくにぶつかりました。

「あつ、たいへん！」

たちまち翼はそのところから、まっぴたつにわれ、飛行列車は黒いけむりをあげて、とんぼのようにもつれあいながら、地上についらくしました。五キロもさきの山の中に。

しかし、このできごとが、あやしい鳩のためにおこったとは、だれも気がつきません。

電気鳩

「ねえ、兄ちゃん。どっかのお家の鳩が、うちの鳩とあそびたい

つて、それでおりにてきたのよ、ねえ」

「うん——」

高一はなまへんじをしました。だって、つかまえようとすれば、ゆびさきがぴりぴりしびれる鳩なんてあるものでしょうか。

そのときでした。飛行列車がっいらくをはじめたのは。

でも、ずっとはなれた高い空の上のことですから、二人はあとで、村の人から話をきくまで、気がつきませんでした。

ミドリは鳩舎をあけてやりました。するとお家の屋根にとまっていた鳩は、大よろこびで鳩舎の中へかえってきました。

しかしそのとき、きょうだいは意外なことに気がついて、目を見はりました。

きょうだいのおどろいたのもむりはありません。十羽いた鳩が九羽しかいないのです。さあ、一羽はどこへ行つてしまったのでしょうか。きょうだいは血眼で家のまわりをさがすうちに、うらの竹やぶのなかに、つめたくなっている鳩の死がいを見つけました。

「かわいそうに。お前は どうして死んだの」

「これはきつと、あの電気鳩のせいだよ」

「えっ電気鳩？ 電気鳩ってなあに？」

そこで高一はミドリに、さっきの青い鳩にさわろうとすると、ゆびがぴりぴりしびれたことを話してきかせました。それで電気鳩、電気鳩と名をつけたんですが、ほんとうに電気鳩が、うちの

鳩をころしたのでしょうか。まったく、きずひとつないのに鳩は死んでいるのです。

「ようし、一つ工夫をして、あの鳩をつかまえてやろう」

そのつぎの日の夕方、高一とミドリとが見はつていると、はたして、その電気鳩が空からおりてきました。お家の九羽の鳩は大さわぎして、屋根の方ににげてしまいました。しかし鳩舎の上には、まだ一羽の鳩がじっととまっていました。

電気鳩はひらりと飛びおりて、そのじつとしている鳩の方へ足をひきながらちかづきました。

すると、どうでしょう。かちつと音がして、電気鳩は高一のしかけたわなに、足をはさまれてしまいました。しかし、電気鳩は

たいへんな力をだして、そのまま空へまいあがりました。足にながいが赤い紙テープを目じるしにして、電氣鳩をおいかけてゆきましたが、ざんねんにも見うしなつてしまいました。

それにひるまず、つぎの日、高一はまたべつの工夫をして、まぢかまえていました。

その夕方、やはり電氣鳩は下りてきました。そして、昨日となじように、鳩舎の上において、よちよちと二、三步あるいたかとおもうと、たちまち、かちつと音がして、電氣鳩は足をはさまれました。が、やっぱりにげてしまいました。そのとき鳩の足には、長い赤い紙テープのほかに、小さなガラスびんがさかさまにつりさがっていました。びんの口からは、とてもいやなおいが

しました。

電気鳩が飛びだしたと見るや、高一は愛犬マルという、よくはなのきく犬をつれて、いっしょに電気鳩のあとをおいかけました。電気鳩は昨日とおなじように村ざかいの山の方にとんでゆきます。赤い紙テープをながくひきながら、ぐんぐんとんでいって、やがて、すがたがみえなくなりました。

でも、高一は、べつにあわてるようすもなく、しきりに、はなをならして走るマルのあとについて、どんどん山の中にわけいりました。

先にたつて走っていたマルは、そのうちに人の出入りができるほどのほら穴の前までくると、ほら穴の入口の草をしきりにかい

で、急にうごかなくなりました。高一は、

「うむ、このほら穴にはいったのだな」

と、ほら穴をにらんで、おもわずひとりごとをいいました。

穴のなかの人

だれもしらないことですが、飛行列車をついらくさせたのは、電気鳩のしわざでありました。高一は、そんなこととはしらず、ただ鳩舎へおりた電気鳩が、だいじな伝書鳩をころしたのにちが

いないとおもって、愛犬マルといっしよに、この山のおくのほら穴の前まで、電気鳩をついせきしてきたのでありました。

マルは、しきりとはなをならして、ほら穴のなかをにらんでいきます。

「マル、しつかりたのむよ」

高一のうまい工夫とマルのでがらとで、電気鳩は、このほら穴のなかにはいったことがわかりましたから、つぎは、なかにはいつて電気鳩をうまくつかまえることです。

高一は、穴のなかにはいつた鳩などはわけなくつかまえられるものとおもっていました。それで、いさましくも高一はマルをつれて、まっくらなほら穴のなかにずんずんはいつて行きました。

用心のために、もつてきた懐中電灯がきみのわるいほら穴の中を
てらして、とても力づよいのです。しかし、かんじんの電気鳩は、
どこまでふかくはいったものか、いつこう、そのすがたが見えま
せん。

「へんだなあ。どこへかくれちまつたんだらう」

高一はマルの頭をなでながら、立ちどまりました。

その時でした。マルがひくくうなりました。高一のさとい耳は、
この時、たれか人の話しごえが、ほら穴のもつとおくの方から、
ぼそぼそきこえてくるのをききつけました。「おや、こんなほら
穴のなかに、たれか人間がいるよ」

高一はふしぎにおもい、マルの首をおさえながら、しずかに、

ほら穴のおくの方にちかづいて行きますと、とつぜん、

「さあ、どうしてもいわねえというのだな」

と、どなるこえがきこえました。

高一がおどろいておくをのぞくと、そこには、めずらしく電灯などがとぼつていて、五、六人のあらくれ男が、まるいかたちにくわつています。そして、そのまんなかには、一人の男がしばらくされていました。

かわいそうなのは、そのしばらくされた男です。身うごきもできないばかりか、おおぜいのあらくれ男から、ひどい目にあっています。

ちょうど、高一のみている方からは、そのゆわえられた男はう

しろむきになっていたので、だれだかよくわかりませんでした。

もし、高一にその男の顔が見えたなら、どんなにおどろいたことでしょう。その時、しばらくいられた男は、きつと顔をあげると、

「いくらきいてもむだだ。ころされたって、いわないといったら
いわないのだ」

と、さげびました。

そのこえをきくと、高一は、はつとおもいました。そのこえは
ききおぼえがあつたのです。

「あつ、お父さまだつ」

高一のお父さまは、ご用のため、とおくへお出かけになつたはずなのに、なぜこんなほら穴のなかに、しばらくいらるのでしょ

うか。高一もびっくりしましたがマルもおどろいてわんわんとほえしました。さあたいへんです。

「だれだっ」

あやしい男たちは、いつせいにたつて、高一のかくれていた方へむかつてきました。高一はあぶなくなりました。マルは一生けんめいで、ほえています。

いまはこれまでとおもい、高一はそのすきに紙きれに、はしりがきをすると、腰にさげていた伝書鳩のあしにつけ、ぱっとはなしました。鳩は、くらやみのほら穴をぬけておもてへとびます。だが、つづいてとび出したのは、おそろしい電気鳩！

つがいの鳩

ほら穴の中の、おそろしいかくとうをあとにして、高一の手紙をもった伝書鳩第一号は、さつとおもてへとびだしました。

くわつくわつと鉄のくちばしをならしながら、そのあとをおいかけるのは、おそろしい電気鳩です。

伝書鳩第一号も、前に電気鳩にひどい目にあっていたので、わざと森や林の中をぬけたり、きゆうに下にまいおりたりなどして、一生けんめいににげて行きました。

しかし、おそろしい電気鳩のくちばしをのがれることはできず、つばさはきずつけられ、羽根はぬけ、一方の目はつきやぶられてしまいました。それでも、伝書鳩第一号はがまんをして、とうとう自分の鳩舎にたどりつきました。

まつさきにそれを見つけたのは、るすをしていた高一の妹ミドリです。

「あらあら、鳩があんなになつて……」

ミドリは、はしりよつて鳩舎の上に、つばさをひろげたままたおれている第一号を、そつとおろして、胸にかかえてやりました。そのとき上の方で、くわつくわつとあやしいこえがきこえました。

第一号はそれをきくと、くるしい中からくうくうとないて、ミドリにあぶないから用心なさいとしらせました。ミドリがすぐに家の方にかけてさなかつたら、電氣鳩のために、どんなひどいけがをしたかわからないのです。

「ミドリちゃん。なにをさわいでいるの」

軍服すがたの良りようた太おじさんが顔をだしました。

血にそまつた鳩のあしから、高一のはしりがきした紙きれがはずされました。

「これはたいへんだ」

と、良太おじさんは、顔色をかえていいました。

「ミドリちゃんのお父さまが、あやしい一団につかまっているそ

うだ。さつそく憲兵隊へしらせなきやいかん」

憲兵軍曹である良太おじさんは、じつはミドリのお父さまが、ある大事なご用をひきうけて旅にでたのに、いつまでたつてもかえつてこないのをしんぱいして、ちようどいま、たずねてきたところなのでした。さつそく、けがをした伝書鳩第一号のもちかえった紙きれをもって、憲兵隊へとどけてたのでまもなく一隊の洋服すがたの憲兵が、トラックにのつてミドリの家にのりつけました。

さあ、なにごとがはじまるのでしょうか。

憲兵さんの話によると、なんでも、すごい電気鳩をつかう外国のスパイがいりこみ、なにか、しきりにわるいことをたくらんで

いるとは、わかっていたが、そのスパイ団がどこにいるのかわからなくてこまっていたのです。ところがいま、高一少年のおかげで、ほら穴のひみつがしれたので、大よろこびです。

「さあ、電気鳩退治だ」

と、憲兵さんは力をこめていいました。

「電気鳩さえ退治してしまえば、スパイ団も水をはなれた魚のようによわってしまおうだろう」

ミドリは、それよりもお父さまと高一兄さんとを、早くたすけてください、とたのみました。

いよいよあやしいほら穴にむかうことになって、憲兵さんたちは、こまった顔をしました。そのほら穴へは、どう行けばいいの

でしょう。

そこへ、おりよく愛犬マルが、足をひきながらかえつてきました。

「ああマルか……。兄ちゃんは？」

ミドリは、すぐ庭にとびだしてみましたが、高一のすがたはどこにもみえません。マルだけが、ほら穴からぬけてきたものと見えます。

マルという、いい道案内ができたので、憲兵さんたちはよろこびいさんででかけました。

ところが山の中にはいった時は、日がまったくくれてしまいました。そのうえマルがどこかに行ってしまったので、憲兵さんた

ちは、どうしてよいかわからなくなってしまうました。

その時です。上の方でくわつくわつというなきごえがしたとおもうと、一つの光るものが、さつととんできました。おそろしい電気鳩があらわれたのです。

ぬけ穴

おそろしいスパイ団のため、山の中のほら穴に、とりこになっている高一少年とお父さまは、今どうしているのでしょうか。

ミドリのたのみをきいて、良太おじさんは一隊の洋服すがたの憲兵をひきつれ、高一の愛犬マルを道案内に、その山の中にわけいました。ところが途中でマルのすがたがみえなくなり、スパイ団のほら穴へゆく道が、わからなくてこまっっているところへ、光まばゆい電気鳩がとんできたのです。

「ふせっ」

と、良太おじさんはさけびました。

「こんなおそろしい電気鳩を、生かしておいてはあぶない。軍曹どの、こいつを私にうたせてください」

と、一人の憲兵がピストルをだしました。

「まあ、まてっ」

と、良太おじさんは、いそいでそれをとめ、

「そんなことよりも、電氣鳩がどこへゆくか、あとをつけてゆく方が大事なんだ。さあ、その二人は、電氣鳩をすぐおいかけろ」
さすがに良太おじさんです。あわてずさわがず、二人に電氣鳩のあとをおわせました。

そのとき、べつの方角から、わんわんと犬のほえるこえがきこえてきました。マルです。マルがほえているのです。良太おじさんは、むつくりおき、

「よし、のこった者は、自分についてこつちへこい」

スパイ団のほら穴は、いよいよ近くにあることがわかりました。良太おじさんは、いさましくも憲兵隊のまつさきにたつて、草

をわけて走ります。おりから、ちようどむこうの山から月がでました。

「こんなところにほら穴があつたぞ。さあ、このなかへ突撃だつ」というが早いか、良太おじさんは懐中電灯を片手に、さつとほら穴へとびこみました。みんなもそれにつづきました。

すると、べつの方角から、ぽんぽんという銃声がおこりました。「うわあつ、憲兵だつ」

と、よろめきでてくるスパイ団は、そこにも良太おじさんたちのすがたをみて、二度びつくり。

「スパイどもめ！　こうなったら、ふくろのねずみもおなじことだ。さあ降参しないかっ」

と、おどりかかる憲兵隊に、さすがのスパイたちも、あれよあれよとさわいでいるうちに、しばりあげられてしまいました。

「あ、良太おじさん——」

と、ほら穴のおくから、こえをかける者がありました。

「おお、そういうこえは……」

と、良太おじさんがかけつけてみると、それはまさしく高一で
ありました。かわいそうに、太いなわでぐるぐるまきにされ、牢ろう
のようななかにころがされていました。

なわをとこうとすると、高一は頭をふって、おくをむき、

「お父さまがいるはずです。はやく助けて……」

「ばんざあい」

と、大きなこえがおこりました。どうなったかと心配していた高一少年や、高一のお父さままで、お国のためはたらいっている秋山技師の二人を助けだすことができたし、そのうえスパイ団のわる者も、おおぜいつかまえることができたのですから、大手がらでした。

「へんだなあ——」

良太おじさんが、首をかしげました。

「なにがへんなのですか」

「だって、電気鳩が、このほら穴にとびこむところをみたのに、いまこうしてさがしてみてもいないじゃないか」

「おかしいね。これはどうやら、ほかにぬけ道があるらしいぞ」

にげた団長

「おじさん。お父さまをくるしめていたスパイ団の団長がみえな
いよ」

と、高一少年がさげびました。

「なに団長が……。うむ、いよいよぬけ道があることにきまつた。
さあ、さがすんだ」

そのとき愛犬マルは、なにおもったか耳をぴんとたて、かたわ
らのおおきい岩のうえにとびあがり、そのむこうにすがたをけし

ました。まもなく、わんわんとマルのほえるこえ！

「それ、ぬけ穴だっ」

と、みなのももの岩をとびこえてみると、なるほど下につづいたぬけ道がありました。いそいでいってみると、ぴかりと光るもの——電気鳩です。マルにおいかけています。

しかも、そのそばには、団長が黒い箱をせおつてにげてゆきま
す。

「おいましてっ——」

と良太おじさんたちは、一生けんめいにおいかけてましたが、ぬけ穴を出たところが、がけの下でした。スパイの団長は、そこにこしらえてあった、なわばしごをつたってがけの上にあがり、そ

して、そのなわばしごを上ひきあげてしまったものですから、いくら強い憲兵さんたちでも、がけをのぼることができません。「ちえつ、ざんねんだ。もうひといきでつかまるところだったのに」

憲兵さんたちは、たいへんくやしがりしました。高一もざんねんですが、はしごがなければのぼれないところだからしかたがありません。

こうして、電氣鳩と、黒い箱をせおったスパイの団長とは、どこかへにげてしまいました。

その後、電氣鳩はどこへいったものか、いつこうにみかけませんでした。

高一の鳩たちは、またもとのように小屋のまわりに、たのしくあそぶようになりました。

高一のお父さまも安心して、あらためて、大事なご用の旅におでかけになりました。

そのうちに、ちんじゆ鎮守さまの秋祭の日がきました。いろいろのみ見世物やおもちやの店がでて、たいへんなにぎわいです。高一は、ミドリをさそつておまいりにゆきました。

やしろの前にならんだ二人は、ふといつなのついた鈴を、がらがらとふつてお父さまが、ぶじにおかえりになるようおいのりをしました。それがすんでから、高一は、ミドリにいいました。

「ねえ、見世物のほうにいつてみようよ」

「兄ちゃん、あれがおもしろそうよ」

と、ミドリがゆびさしたのは、たくさんの見世物のなかにまじつて、「ぽっぽ座」と、そめだした赤や青の旗をたてた小屋です。

「さあいらっしやい。人間よりかしこい鳩の曲芸です。世界一のかしこい鳩です。坊ちゃん嬢ちゃん、さあさあおはやく……」

と黒めがねをかけた男が、客をよんでいます。

鳩ときいては、鳩のすきな二人は見たくてたまりません。二人はいそいではいりました。

はいつてみると小屋の中はがらんとしていました。見物人もほんのすこしです。

「へんだなあ」

とおもったのですが、そのとき印度服インドをきた鳩つかいが、金ぴかの鳥かごを手にさげて、ぶたいにあらわれました。

「さあ、お目をとめてごらんください。これが世界一のかしこい鳩です」

鳩つかいは、長いむちでかごをたたきながら、二人の前にさしだしました。かごの中には、つばさの色がうす青色で、金のすじが二本とおっている鳩が、じつとこつちをみていました。

(あつ、電気鳩そつくりだ)

と、高一は目をみはりました。

「さあ、これからこの鳩にお嬢さんのおとしや、名前までもあてさせましょう。お嬢さん、どうぞこちらへあがって下さい」

「だめだよ、ミドリ」

と、高一はそれをとめました。しかし、鳩つかいは知らぬ顔をして、ミドリをぶたいにひっぱりあげ、みょうなだいにのせました。

魔術師

鎮守さまのお祭は、いま、おみこしがかえってきたので、村の人たちは、その方に気をとられて、わっわっというさわぎのさい

ちゆうです。

こつちは、あまり見物人のはいつていない、電気鳩によくた世界一のかしこい鳩をつかう、見世物小屋のなかです。印度服インドをきた鳩つかいに手をとられて、ミドリは、そのぶたいのうえにあげられましたから、兄の高一はなんだか、胸さわぎがしてなりません。

「さあ、鳩さん。お嬢さんのおとしは？」

と鳩つかいは、耳を鳩のそばへ近づけました。

すると鳩は、鳩つかいの耳のなかを、くちばしでもって、ちよつちよつとつきました。

「ははあ、そうですか」

と、鳩つかいは、さもわかったような顔をして、見物人の方に
向い、

「鳩さんが申しますには、このお嬢さんのおとしは十歳だそうで
す。お嬢さんあたりましたか」

ミドリは、ほんとうに自分のとしをあてられたので、おどろい
てしまいました。見物人は、手をぱちぱちたいて鳩をほめまし
た。

「さあ、そのつぎはお嬢さんのお名前ですが、鳩さん、これはな
かなかむずかしいが、あてられますか」

鳩つかいは、また耳を鳩にちかづけました。

すると鳩は、また鳩つかいの耳のなかを、くちばしでもって、

ちよつちよつとつきました。

「ああそうですか。そこにぶらさがっている万国旗の右から三番目のいろ——というと……」

と、鳩つかいは、ぶたいにはりまわしてある旗をみまわしました。右から三番目は、ブラジルの旗でした。

「ああ、ブラジルの旗ですね。この旗のいろは青ですね。すると青子さんかしら」

すると、見物人はこえをそろえて笑いだしました。青子なんてめずらしい名だからです。

「青子はおかしい。もつと、はつきりおしえて下さい。なに、青ではない緑だというのですか。なるほど、ミドリさん。ミドリさ

んとは、じつにかわいいお名前ですね」

「あたったわ」

なんとというかしこい鳩なのでしようと、ミドリは、かんしんしてしまいました。見物人は、また、手をたたいて鳩をほめました。見物席では兄の高一だけが、おこったような顔をして、鳩つかいをにらみつけています。

「さあさあ、そこでついでにもうひとつ、この鳩をつかってすばらしい魔術をごらんに入れましょう」

といって印度人は、おくの方に合図をいたしました。するとおくから、こどものからだが入るくらいの大きさの、美しい箱をかっいできました。その箱は二つでした。それをぶたいにならばま

した。さあ、これからどんなことがはじまるのでしょうか。

鳩つかいは、まず、ひとつの箱のなかに、金色のすじの入った鳩を、かごとに入れました。

それから、こんどはミドリの手をとって、

「さあお嬢さんは、こっちの箱へ入ってくださいね。なんのこわいことがありますよう」

ミドリが箱のなかに入ると、鳩つかいは急ににこにこして、

「まず、箱のふたをしめます」

と、両方の箱のふたをかたんとしめ、

「さあ、たしかにこっちの箱には、世界一のかしこい鳩がはいり、こっちの箱には、かわいいお嬢さんがはいりました。ところが、

私きあいが気合をかけますと、ふしぎなことがおこります」

えいつと、気合をかけて、ミドリのはいつていた箱のふたに手をかけました。

きえた妹

鳩つかいはにやりと笑って、ミドリのはいつていた方の箱のふたをあけました。

「あつ」

と、高一の口から、おどろきのこえがとびだしました。なぜと
いって、たしかにミドリがはいったにちがいないその箱のふたを
とつてみると、そこに、ミドリのすがたがないのです。そして、
そのかわり金色のすじのある鳩がはいっているではありませんか。
「おやおやこれはふしぎ」

と、鳩つかいはなおも、うすきみわるく笑いながら、

「お嬢さんが鳩にばけてしまいました。では、鳩の方は、なにに
ばけているでしょうか」

といつてもう一つの箱のふたをとると、あらふしぎ、箱の中は
からっぽです！

ミドリは、いったいどこへいったのでしょうか。

「おじさん、ミドリを早くもとのようにかえしておくれよ」

と、高一は、ぶたいにとびあがっていいました。

「あなた、なぜ見世物のじやまをしますか」

「だって、ミドリをかくしたりして……」

「まだ、じやまをしますね」

というと、鳩つかいは、いそいでぶたいの幕をしめさせ、高一を、見物席から見えないようにしてしまいました。そして、いきなり鳩のかごの戸をあけました。そのとたん、鳩は、すごいいきおいで、高一めがけてとびかかりました。まるで電気鳩そっくりです。

「あつ」

と、おもったときはもうおそく、高一は鳩にとびつかれて気をうしなつてしまいました。

ミドリも高一も、まったくひどい目にあつたものです。世界一のかしこい鳩だというが、それは、あのおそろしい電気鳩だつたのです。鳩つかいにばけていたのは、にくいスパイ団長でありました。

高一は、ひやりとするつめたい風のおかげで、はじめて気がつきました。そこは、あのにぎやかに、かざりたてた見世物小屋のなかではなく、うすぐらい物おきのようなところでありました。

はっ、とおもつておきあがろうとして気がつきました。両手はうしろにまわされ、胸も腹もふといなわで、ぐるぐるまきにされ

ていました。高一は、はがみをして、なわから手をぬこうとしたがだめです。

いったい、ここは、どこなのでしょうか。

「ミドリちゃんは、どうしたんだろう。やはり、あのわる者にかまっているんだろう。かわいそうに」

高一はミドリのことをおもうと、どうしてこのままじつとしていられましょう。しかし、なわはかたくむすばれて、とけそうもありません。

くやしなみだをぽろぽろこぼしているところへ、そとに足音がきこえ、こつちへ近づいてきます。なに者がやってくるのでしよう。

すると、高いところにあいていた窓に、一つの顔があらわれました。それは少年の顔です。みたこともない顔ですが、大きな口をあいてよだれをながしていました。

ポンちゃんというその少年は、わる者の仲間ですから、とても、高一をたすけてくれません。

高一は、なにをおもいついたか、いつも腰にさげている鳩をよぶ笛を、ポンちゃんにあげるから、もっておゆきといいました。すると、ポンちゃんは大よろこびで、屋根のやぶれ目から、柱つたいにするするとおりてきて、高一の腰についている笛をとると、また、そとにでてゆきました。

ほう、ほう、ほう。

笛は、そとでさかんになっていきます。ポンちゃんがおもしろがってふいているのです。

すると、それから一時間ほどたつて、窓のそとに、とつぜん、たくさんの鳩の羽ばたきがきこえてきました。高一はにっこりとしました。

ハグロとアシガラ

世界一のかしこい鳩をつかう鳩つかいとは、まっかなうそで、

これこそ、おそろしいスパイ団の団長がばけていたのでありました。高一は、体をぐるぐるまきにされ、穴ぐらのなかにおしこめられてしまつて、もう、ミドリを助けるどころではなくなりました。そこで、かんがえたあげく、もっていた笛を、わる者仲間のポンちゃんにやりますと、ポンちゃんはよろこんで、それを、ほう、ほう、ほうとさかんにふきならしました。そのうちに穴ぐらのあかり窓のところいきこえる羽ばたき！

高一は、ポンちゃんに笛を吹かせてから、この羽ばたきの音を、どんなにか、まっていたのです。

「しめた！ ぼくの家が鳩がきたぞ」

きゆうに、にこにこ顔になった高一は、あかり窓の下にすりよ

って、ぴいぴいと口笛をふきならしました。

すると、くう、くう、くうとなきながら、ばたばたと羽ばたきして穴ぐらにとびこんできたのは、まさしく、高一のかわいがっていたハグロとアシガラという二羽の伝書鳩でした。

鳩は、高一の肩にとまって、くう、くうとなきたてます。鳩にも、主人の一大事がわかっていたのでしよう。

高一は、かわいい鳩に、なつかしげにほおずりをしてやりました。

しかし、いつまでもそうしてられないことを、よく知っていた高一は、体をかがめて、自分のズボンのうらのきれを口でくわえると、ベリベリとやぶりました。そして、そのきれを、口うつ

しにハグロにくわえさせると、ぴいぴいぴいぴいと口笛をふきました。

その、ぴいぴいぴいという口笛は、

「はやくお家におかえりなさい」

という鳩の号令だったのです。ですから、ズボンのきれをくわえたハグロは、さつきはいったばかりのあかり窓から、いさましく外にとびだし、高一の家へかえってゆきました。

ちょうど、家の前に高一の愛犬マルがいるのをみると、ハグロはその前に、くわえてきたズボンのきれをおとし、マルを案内するかのよう、さきにたつてとびました。

高一のいれられている穴ぐらの入口のところで、がちやがちや

とかぎの音がし、いきなり入口の四角なあげぶたがあいて、にくいスパイ団長がはいつてきました。

「やい小僧、いいところへつれてつてやるから、このなかへはいれ」

と、いって、手下のはこんできた、たるをゆびさしました。

「いやだ。それよりもぼくの妹をどうしたんだ。はやく、ぼくをミドリにあわせてくれ」

「ミドリはお前より一足さきに船にのりこんでらあ。むこうへいつてからあわせてやる」

「うむ、さては、妹もたるづめにされたのか」

「いや、たるにいれるのは、お前みたいなあばれん坊だけなんだ。

「さあはいれ」

高一は力およばず、とうとうたるにいれられました。

どこへいく？

高一のおしこめられた、たるは、まもなく、外にかつぎだされ
ました。いったい、どこへはこばれてゆくのでしょうか。まっく
らなたるのなかで、高一は、気が気でありません。

くう、くう、くう。

高一のおなかのへんで、ないているものがあります。それはもう一羽の鳩、アシガラでありました。高一がわる者のため、たるにいれられるすこしまえ、わずかのすきをうかがって、アシガラを上着の下へいれてかくしておいたのです。

そのうちに、たるは、どすんとかたいものの上におかれました。それから、つぎつぎに、どすんどすんと、ほかのたるがおかれるようすです。

やがて、がたんという音とともに、たるをのせたトラックは走りだしました。

「どこへつれられてゆくんだろう。ミドリは、どうしているんだらう」

と、高一は、たるのなかにゆられながら、それを考えていました。

一^{キロ}軒も車が走ったかとおもうころ、車のうえがさわがしくなり
ました。

「おや、あの犬は、この車をおっかけてくるんじゃないか」

「うん、小僧がいるのをかぎつけたんだ」

「めんどうだ。ピストルでうってしまえ」

「まてっ、ピストルの音をきかれたらどうするのだ。石ころをな
げつけてやれ」

えいえいと、石ころをなげるこえがします。

わわわわ、わんわん、とはげしい犬のなきごえが、車をおって

きます。

「あつ、あのこえはマルじゃないか」

忠犬マルは、一生けんめいに、高一をさらってゆくトラックを
おいかけてくるのでありました。

どうして、それを知ったのでしょうか。そのわけは、鳩のハグロ
が、マルを案内して、ここまでおいけてきたのです。

わわわわ、わんわん。

「石ころじやだめだ。電氣鳩をだそう」

「よし、電氣鳩だ」

スパイ団長は、ついにおそろしい電氣鳩をぱつとはなしました。
高一は、それをきいておどろきました。

きや、きやんきやんきやん。

まもなくマルのかなしいさげびごえがきこえます。あわれ忠犬マルも、電気鳩にやられたようすです。

高一はたるの中で、歯をくいしばってざんねんがりました。しかし、電気鳩にかかつては、マルはどうすることもできませんまい。「これでいい。ああ、ほねをおらせおった」

と、これはわる者のためいきです。

トラックは、四、五時間も走りつづけたのち、港につきました。たるはそこで船のそこへつみかえられました。それは、外国の貨物船のなかでした。

その夜、高一ははじめて、すこし手のいましめのなわをゆるめ

られ、そして、ごはんがわりに、五つ六つのりんごがたるのなかになげこまれました。なんとというひどいことでしよう。

わる者は、また、たるのふたをしつかりしめて、でていってしまいました。

ごごととときかいのなる音がして、汽船は港をでてゆくようすです。

「どこへゆくのだろう。そして、ぼくやミドリをさらっていつてどうする気なんだろう」

高一は、なんとかしてミドリにめぐりあいたいと、それを思いつづけました。

すると、にわかにはげしいくつつ音がして、船そこへ大勢の人が

かけおりてくるようすです。

「おい、早くさがせさがせ。早くしないと、沖に見はつている日本の軍艦にしずめられちゃこまる」

「だって、電気鳩がまさかこんな船ぞこまでとんでくるものですか」

「やかましいやい。お前がぼんやりしているから、こんなことになるんだ」

そのうちに、どうんと大砲の音です。

「さあ、日本の軍艦がうったぞ。船をとめろというあいずだ。すぐ電気鳩をさがさないと、ほんとうにうたれるぞ」

そういうこえは、たしかにあのにくいスパイ団長のこえです。

どうやら電氣鳩がにげたようすです。そしてこの汽船は、日本の軍艦においかけられているらしいのです。

高一はそれを知って、胸をおどらせました。近くの海を見はつている日本の軍艦が、このあやしい船をみつめてきてくれれば、きつと助かるにちがいない。

しかし、その前に日本の軍艦の砲弾が、この汽船にうまく命中すれば、高一はたるとともに、海ぞこふかくしずんでしまわねばなりません。どうんどどうんど、砲声はいよいよ近づいてきます。さあどうなる。たいへんたいへん。

ながれるたる

高一少年をさらってゆく外国の貨物船が、いましきりに日本の軍艦から砲撃されています。

高一は、伝書鳩アシガラとともに、船ぞこにころがるたるのなかに、とじこめられているのです。このまま、汽船がうちしずめられると、高一は、海へおちて死んでしまうでしょう。

そのとき、天下無敵に強い電気鳩を、あやまつてにがしたスパイ団長などのわる者たちは、たるをおいてある船ぞこをしきりにさがしています。高一は、ふとひとつのうまい工夫を考えつきま

した。

高一は一生けんめいで、いましめのなわから手をぬきました。ようやく、手がぬけると、こんどは力いっぱい、たるのふたを両手でつきあげました。三度、四度とやっているうちに、さすがに、かたくはまっていたふたも、ぎしりと音がして、すこしすきまができました。わる者たちは、わあわあさわいでいるので、その音に気がつきません。

「しめた。では、ここらでだましてやろう」

と、高一がたるのすきまから伝書鳩アシガラをはなすと、アシガラはぱたぱたとびまわります。

「あつ、電氣鳩がいたぞ」

「しめた。さあ、はやくつかまえろ」

わる者たちは、電気鳩だと思いこんで、アシガラを大きわぎでおいかけました。

計略がうまくいったので、高一はたるの中でおおよろこびです。こうしておけば、しばらく日本の軍艦へむけておそろしい電気鳩をはなすことはできません。

「おい気をつけろ」

とスパイ団長のどなるこえがします。

「電気鳩をつかまえるときは、ゴムの手ぶくろをはめていないと、電気にかんじて、大けがをするぞ」

つい団長は、だいじなひみつをもらしました。

ばさつとあみをふりまわす音だの、鳩の強い羽ばたきなどがいりみだれて、たるの中の高一の耳にきこえてきました。

「さあ、早く電気鳩をつかまえろ、そして日本の軍艦めがけてはなして、しずめてしまえ」

わる者たちはいよいよ大きわぎです。

そのうちに、どかあんと音がしたと思うと、どつと船ぞこに海水がはげしくながれこんできました。日本軍艦のうった砲弾が、船ぞこをみごとにうちぬいたのです。

とたんに、高一のはいつていたたるは、海水にのつてすうつともちあがると、水のすごいきおいで、かいだんのすきまから甲板にとびだしました。そのひょうしに、たるのふたは何かにつつ

かつて、高一が出るひまもなく、またもとのようにかたくしまつてしまいました。そして、ごろごろころがっているうちに、ぼちやあんと海中におちてしまいました。

高一は、目をまわしてしまいました。気がついたときには、たるはずみもせず、波のまにまに、ただよっているようでしたが、体はぐったりつかれて、ねむくてしかたがありません。

無人島

それからいく時間たったのか、おぼえていませんが、高一は、ねむりからさめました。

「おや、海の中にゆられゆられていたと思ったのに、これは、いったいどうしたんだろうなあ」

まったくへんなことでした。高一は、やはりたるの中にとじこめられているのにたるはゆれもせず、じつとしているのです。

「これはたいへんだ」

高一はたるのそとに、なにか音でも聞えはしないかと耳をすましましたが、なんの音も聞えません。そこで、大決心をして、たるのふたを力まかせにおしました。

ふたは、ぽかりとあきました。高一はたるの中から首を出しま

した。

「あつ、海岸だ！」

嵐はすっかりおさまり、朝日はまばゆく海上にかがやいていました。あたりはまつくろな砂が、いちめんにある美しい海べですが、うしろには、けわしい岩山がそびえていて、おそろしげに見えます。

「ここはどこだろう」

高一は、たるのなかから出て、めずらしげにあたりをながめました。まったく見たこともないところでした。

高一は元気をだして、うら山にのぼってみました。そこへあがると、きつと村かなんかが、みえるにちがいないと思ったからで

す。

ところが、うら山にのぼってみておどろきました。村が見えるどころか、ここはいつけんの家もない小さな無人島（人のいない島）だったのです。

「無人島へながれついたとはよわった」

と、高一はひとりごとをいいました。

そしてなおも、あたりの海面を、しきりにみまわしていました。が、

「あつ、ボートみたいなのが二そう、こつちへこいでくるぞ」
たしかにボートです。大ぜいの人が、ぎっしりのついているよう
です。

高一は、おういと手をふりかけましたが、いや、まてまて、もし、わるいやつらの船だったらこまると思つてみあわせました。

やがて、ボートは波うちぎわにつきました。どやどやと船からおりてくる人をうら山のかげから見ている高一の目は、きゆうにかがやきました。

「やあ、ミドリがいる！」

ミドリばかりではありません。

そのそばには、あのにくいスパイ団長もいました。

どうやら、れいの貨物船は、日本軍艦の砲弾にあたってしずんだようすです。だからわる者たちは、ボートにのつてにげてきたのでしょう。

「ああ、かわいいそうな妹……」

ミドリは、兄の高一が山の上から見ているとも知らず、しよんぼりとして、わる者たちに手をひかれていました。村の見世物小屋からさらわれたままのすがたです。団長は、このかわいいそうなミドリを、どうしようというのでしょうか。高一はすぐにもとんでいきたいきもちでしたが、そんなことをすれば、またいつしよにつかまると思つて、がまんしました。

高一はすき腹をかかえて、夜をむかえました。わる者たちの方は、海べりにテントをはり、さかんに火をもやして、なにかうまそうなたべ物をにているようです。

高一は、うら山からぬけだすと、そつと、テントの方へおりて

ゆきました。さいわい、たれにも見とがめられずに、テントに近づくことができました。

「団長、こんな足手まとの娘なんか、ひと思いにころしてしまつた方がいいじゃないか」

たれかが、おそろしいことをいっています。

「ばかをいえ。お前にはまだわからないのか。この娘をつれていつて父親をせめりや、こんどこそは、日本軍の一番だいにしている『地底戦車』が、どんなもので、どこにかくしてあるかをいわせることができるじゃないか」

わる者どもの話によつて高一は、お父さまが、日本軍にとつて、たいへんだいじな「地底戦車」のしごとをしていることをしりま

した。スパイ団長は、これからお父さまをひどい目にあわせ、日本軍に大きなそんをさせようとしているのです。

ミドリもかわいそうだが、お国のひみつをしられることは、なおさらこまったことです。

「どうしてこれを、日本軍や、お父さまにしらせたらいいだろう」
高一は、なんとかしていいちえをひねりだしたいものと考えながら、ふと、波うちぎわを見ると、一つの大きなたるがながれついています。そばによってみれば、ふしぎや中なこと音がしています。なにが入っているのでしょうか。

いたいた、電気鳩

無人島にながれついた高一少年のことは、後から、おなじ島へあがってきたスパイ団長や、その手下のわる者どもに、まだしれていないようでありました。しかし、そのうちにしれてしまうことでしょう。そのときはたいへんです。きつとつかまってひどい目にあうにきまっています。

高一が、波うちぎわで、ひとつの大きなたるを見つけたことは、まえにいいましたが、近づいて、たるのふたをすこしあけてのぞいてみると、おどろくではありませんか、なかには、見おぼえの

ある電気鳩がはいつていたのです。

「あつ、電気鳩だ。なぜこんなところにはいつているのだろう」
目のぴかぴかひかる電気鳩です。人がさわれば、電気がつたわつて死ぬ電気鳩です。そして、スパイ団長が船のなかで行方をさがしていたその電気鳩です。

きつと、なにかのひようしで、このたるのなかへまよいこんだとき、うんわるく、ふたがぱたんとして、でられなくなつたのでしよう。

電気鳩はどうかしたらしく、足でたつこともできず、ぱたぱたとつばさをふるわせるばかりで、元気がありません。高一は安心して、電気鳩を、たるの中から棒きれでそつとだしてみました。

「へんだなあ、あんなにあばれた鳩だったのに」

高一は、首をかしげました。

高一は、思いがけなく電気鳩を、とりこにしたので、たいへんうれしく思いました。しかし、このままにしておいては、いつスパイ団にとりもどされるかもしれないと思ったので、高一は、鳩をもとどおりたるのなかへ入れたのち、海岸の砂はまに、大きな穴をほり、そのなかにうめてしまいました。

「こうしておけば、スパイ団にみつかるしんぱいはないだろう。さあ、こんどはかわいいそうなミドリを、たすけてやらなくてはならない」

日のくれるのをまって、高一はだいたんにも、スパイ団のテン

トにそろそろしのびよりました。するとテントのなかでは、団長をはじめわる者どもが、お酒をのんで、おおごえでうたったりおどったりしているところでありました。

そのうちに、団長もよろよろとたちあがって、手をふり、足をふんで、おどりだしましたが、かたにかけている小さなかばんが、ぶらぶらするので、じやまになって、うまくおどれません。

「いよう、団長しつかり。そんなきたないかばんなんか、おろしておどれよ。あつはつはつ」

たれかが、ばかにしたような笑いかたをしました。団長は目をむいて、

「ばかをいえ。きたなくても、この中には、電氣鳩をうごかす大

事なきかいがはいっているのだぞ。どうしておろせるものか」

電気鳩をうごかすきかい！ ああ、そんなきかいがあったのか。電気鳩は、このかばんをもっているスパイ団長の手によつてうごかされていたのです。高一は、テントのすきまから、目をまるくしておどろきました。

「電気鳩は、海のそこにしずんでしまつたんだよ。うごかすきかいばかりのこつていても、なにも役にたたんじやないか。あつはつはつ」

「そうだ、それもそうだな。じゃ、こんなかばんを大事にしておくんじやなかつた」

そういつて団長は、その黒いかばんをかたからはずして、テン

トのすみにほうりなげました。そして、すっかり身がるになつて、ゆかいにおどりはじめました。

そのとき、テントのすみから、小さい手がぬつとあらわれまして。その手は、そろそろと、黒いかばんの方へちかづき、それを、じつとつかむと、するするとテントの外にひっぱりだしました。

あやしい小さい手です。それは、いったいたれの手だったのでしようか。

めぐりあい

「しめしめ、電気鳩をうごかすきかいが手にはいったぞ。ようし、いまに見ておれ」

テントの外では、高一少年が黒いかばんをぶんどって、おおにこにこでありました。

「さあ、ここで、わる者どもが酒によっぱらっているうちに、ミドリをさがすのだ」

と、高一は勇氣百倍して、ほかのテントへいつてみました。

丘のかげに、ひとつのまっくらなテントがありました。どうやら番人がいそうもないので、高一は、もっていた懐中電灯をつけてみると、中には、船からもってきた荷物がたくさんつんであり

ます。

「おうい、ミドリちゃんはいないか」

高一は、早口に妹の名をよんでみました。

そのとき、つみかさねてあつた荷物が、がさがさとうごきだしました。

「あつ兄ちゃん。あたしはここよ」

帆布はんぷがまるめておいてありましたが、その中から、とつぜん、なつかしい妹ミドリのこえがしたものですから、高一は、

「おお、ミドリちゃん。よくまっついてくれたね。いまたすけてあげるよ」

と、かけよりました。帆布をのけていると、その下にかわいそ

うなミドリが、手足をくくられてつながれていました。高一は、わる者どももの、にくいやりかたにはらをたてながら、つなをほどこいてやりました。そして、きょうだいは、ひさしぶりに、たがいに手と手をとりあつたのです。うれしさに、なみだが、あとからあとからわいてきて、きょうだいは、はじめのうちは、おたがいの顔をよく見ることができませんでした。

「ぐずぐずしてはたいへんだ。ミドリちゃん、すぐ、にげよう」

高一は、妹をひつたてるようにして、テントの外にのがれました。そして、電気鳩を砂のなかからほりだし、それを、ゴムびきのかっぱにつつんでわきにかかえました。

「兄ちゃん、どこへにげるの」

「船にのつて、すこしでも早く、この島からにげだすのだよ。海へ出れば、きつとどこかの船にであい、たすけてくれるよ」

くらい海岸へでてしらべてみますと、ボートが二そうありました。さいわい番人もいません。高一にはなかなか動かしにくいボートでありましたが、それでも一生けんめいに海の中におろし、そのひとつにのりこみ、もう一そうは、うしろにひっぱってゆくことにしました。

高一は「地底戦車」を発明したお父さまが、敵国からにらまれていることがしんぱいではありません。それで、死にもぐるいで、くらい海にこぎだしました。

「兄ちゃん、もうひとつのボートはいらないのでしよう。おいてくればよかったのにねえ」

「いや、のこしておけば、わる者どもが、それにのつておっかけてくるじゃないか」

高一は、いつもあわてないで、よく考えていました。やがて、ボートの一つは船ぞこのせんをぬいて海の中にしずめてしまいました。これで、スパイ団長をはじめわる者どもは、無人島に島ながしになって、どこへもゆけなくなつたのです。やがて気がついて、さて、おどろくことでしよう。しかし、あのわる者どもが、そのまま、おとなしく島ながしになっているでしようか。

くらい海を、高一とミドリのボートは長いあいだただよって

ました。

やがて夜が明けました。たすけの船はと思つてあたりをたえずさがしたのですが、いじわるく、船のかたちも、煙のかげも見あたりません。どうなることかと思つているうちに、その日のおひるすぎになつて、二人はどうじに、ぶうんという音を耳にしました。

「あつ、飛行機だ」

晴れわたつた空を、手をかざしてさがしてみますと、あつ見えました見えました、一だいの飛行機がたかいところをとんでいます。

「おお、こつちへくるらしい」

助けをよぼうか、どうしようか、と思っているうちに、飛行機は、ぐつと前の方をさげました。敵か味方か、どっちの飛行機でしようか。

はたらく電気鳩

高一少年は、スパイ団にとりにこにされた妹ミドリをすくいだして、無人島をあとに、ボートにのつてにげてゆきます。ボートのなかには、高一がスパイ団からぶんどった電気鳩と、その鳩をう

ごかすきかいのはいったかばんとをつんでいます。これはたいへんなお手がらです。ボートをこいで、沖の方にてゆくうち、一だいのあやしい飛行機が、二人の頭の上にあられて、あらあらしくさつとまいさがってきました。敵か味方かと思っているうちに、飛行機は、まっしぐらにばくだんをはなちました。ああ敵です。

「兄ちゃん、ばくだんよ。ああ、あぶない」

ミドリは、顔をまっさおにしてさげびました。高一少年は、ボートにばくだんがあたつてはなるものかと、オール（かい）を力いっぱいこいで、のがれようとつとめました。

ど、どかあん。ぐわうん、わわわん。

二人のきょうだいの目の前に、とつぜんものすごい水けむりがたちました。ばくだんがはれつしたのです。いいあんばいにあたりませんでした。そのかわり、ものすごい波がおこつて二人のボートはひっくりかえりそうになりました。空では、敵の飛行機が、またばくげきのかまえをしました。

「あつ兄ちゃん、またばくだんをおとすわよ」

高一是くやしきにはがみをしました。飛行機は、たしかに、スパイ団の味方なのです。

この飛行機こそ、きょうだいがにげだしたあとで、それときづいたスパイ団が、無線電信でよびよせたものでした。きょうだいののちは、風のふくまえにたてた、ろうそくの火のようにあぶ

ない！

さあ、どうなるか。せつかく、ここまでにげのびた、いさましいきようだいなのに。

高一少年は、いまは、おどろいたり、かなしんだりしていません。なんとか妹のいのちをたすけることを考えだしたいとあせっています。どうすればいいのでしょうか。

「ああ、そうだ。いいことがある」

「いいことって、どんなこと」

「電気鳩をつかってみよう」

高一少年は、すばやくきかいのかばんをかたにかけると、その目もり盤めぼんを、うごかしてみました。すると、電気鳩がつつみのな

かから出てきました。

「うむ、電気鳩がうごきだした。もう電気鳩は、こっちの味方だぞ」

電気鳩は、かばんのなかにある電気のしかけでうごくことがわかりました。外国には、こうしたきかいで、人間がひとりものつていない飛行機をとばす発明があります。それも電気力でうごかすのです。それとおなじしかけです。

目もり盤のまわしかたで、電気鳩はどっちへでもとびます。それがわかったので、高一は電気鳩を敵の飛行機へむけてとびかからせました。

ぱたぱたと、つよい羽ばたきをして、電気鳩は、飛行機をおい

かけました。

「電氣鳩さん、しつかり」

電氣鳩は、すごいはやさでとんでいって、ついに飛行機につきあたりました。ぱつと赤い火花がちったかと思うと、たちまち飛行機はほのおにつつまれて、ついらくしました。

「ああすてきだ。ばんざあい」

「ああよかったわ。電氣鳩さん、ばんざあい」

きょうだいはボートの中で、両手をあげてさげびました。

わる者ののつた飛行機は、海中におちて、そのまま波にのまれて見えなくなりました。

そのとき、いつのまにあらわれたか、駆逐艦が一せき、波をけ

たてて二人のボートをたすけにきました。駆逐艦のうしろにはた
めく軍艦旗をみたとき、高一とミドリは手を取りあつて、うちよ
ろこびました。日本の軍艦旗です。

駆逐艦からはボートがおろされ、水兵さんがそれをこいで、二
人の方にちかづき、大きい駆逐艦の上へたすけあげてくれました。
電気鳩は、もちろん、高一がきかいをまわして手もとへよびよ
せました。

軍艦から大陸へ

わが海軍の駆逐艦にすくいあげられたきようだいは、たちまち艦内の人気者になりました。

艦長吉田中佐は、きようだいの冒険談をきいて、そのいさましさをほめました。そして、艦隊の方へ無線電信をうって、にくいスパイ国をこれからせめてもよいかと問いあわせました。

すると、すぐ艦隊の司令官からへんじがあつて、スパイ国のせいばつよりも、「地底戦車」を発明した、きようだいの父親が、いまわる者どもにひどい目にあつてゐるから、二人をつれてすぐこつちへかえつてくるようにと命令が出ました。

高一とミドリは、しんぱいでもあり、またおよろこびです。

これから海軍の軍人さんたちと、父親をたすけにゆくことになったのですから。駆逐艦は北の方にむきなおると全速力をだしました。

荒海の波をけたてて、ずいぶん、ながい間走りつづけて、駆逐艦はついに港につきました。

高一とミドリとは、艦長におわかれをいって、大石大尉という士官につれられて上陸しました。

上陸してみると、これは日本ではなく、朝鮮半島でありました。朝鮮半島もずっと北の方で、満州国にちかいところの、さびしい港町でありました。

「大石大尉、私たちのお父さんはどこにいるのですか」

と、高一がたずねると、大尉は顔をくもらせて、

「それがねえ、たいへんなところなのだよ」

「たいへんなところというと——」

父親がたいへんなところにいるときいて、高一とミドリはまっさおになりました。

大石大尉は金庫をあけて、中から一枚の地図をとりだし、高一とミドリの前にひろげました。

その大地図は、国ざかいふきんのくわしい図面でした。なかほどに大きな川がながれており、その川のまん中に、中の島があります。

その中の島を大石大尉はゆびさして、

「この中の島なんだよ。あなたがたのお父さまがとりこになつて
いるところは——」

「えっ、とりこですって」

「そうだ、敵のため、ここにつれこまれたのだ。敵はお父さまの
発明した『地底戦車』のひみつをしりたくて、こんなひどいこと
をしたのだよ」

「なぜ、助けださないのです」

高一はこぶしをにぎってさげびました。

「まあ、きってみてごらん」

高一とミドリは、大石大尉にともなわれて、ざんごうへ出まし
た。そこから二本の角が^つでたような望遠鏡で、中の島の方をそつ

とのぞかせてくれました。

「ああ、これはトーチカだ」

「えっトーチカ。トーチカって、あの——」

きょうだいのおどろくのもむりではありません。鉄とコンクリートでかためたちいさい要塞ようさいで、そのちいさい穴から大砲や機関銃が、いつでももうてるように、こつちをむいているのです。せめてもなかなかおちない要塞です。

「せめてゆけないこともないが、そうすると、お父さまもころしてしまふ。まったく私たちもこまっているんだ」

大石大尉は、ざんねんそうにいいました。

いろいろ苦勞して、せつかくここまできてみれば、きょうだい

の父親はトーチカの中にとらわれの身となつて、こつちから鉄砲もうてないのです。高一も、がっかりしました。

しかし、どうしてこのまま父親をみごろしにできましょう。ミドリはなくばかりです。

それからというものは、高一はたすけだす工夫をいろいろと考えました。そして、ついに大決心をしました。

それは三、四日のちの朝のことです。中国服すがたの高一は、川上から船にのりこみました。高一は、あのおそろしいおそろしい力の電気鳩をつれています。そのほかに、一頭のなつきやすい軍用犬をかりうけて、船にのせました。

いよいよ決死の冒険です。高一はうまく父親を助けだせるでし

ようか。

輝く日章旗

中の島にある敵のトーチカに、お父さまがおしこめられているときいて、高一少年は大決心をしました。妹ミドリのは、大石大尉などによくたのんで、高一は中国人少年にすがたをかえ、あのおそろしい力のある電気鳩を、ゴムの袋に入れて腰にさげ、一頭の軍用犬をつれて、川上から船にのりました。

さいわい、川の上には朝ぎりかもやもやとたちこめたので、うまく敵兵の目をくらまし、ぶじに中の島にこぎよせることができました。

さあ、これからどうして、お父さまの秋山技師をたすけただすか？

高一としては、もとより命をなげだしての大しごとです。父親が敵にとりこにされているのをみて、どうして、じつとしていられますようか。また、日本の国をまもる「地底戦車」を発明したお父さまを、いつまでも敵にうばわれていて、それでいいものではないでしょうか。といって、日本の兵隊さんがせめれば、お父さまの命があぶない——子供なればこそできるかもしれないという、今

日の大冒険なのです。

「お父さまをぶじにすくいだすことができれば、ぼくは、死んでもいいんだ」

島についた高一は、まず船のなかから、りんごのいっぱいはいったかごを上にあげました。そして、軍用犬をつれて島にとびあがりました。

高一は、りんごのかごをかたにかけて、トーチカの方へ歩いてゆきました。

「こら、少年まで。どこへゆくんだ」

思いがけない立木のかげから、銃剣をかまえた敵兵がとびだしました。

「……」

高一は口をきかないで、かごのりんごをゆびさしました。そしてむしやむしやたべるまねをして、ほっぺたがおちるくらい、おいしいぞという顔をしてみせました。敵兵は、

「なんだ、お前は口がきけないのか。りんごを買えというのだ。なるほどうまそうなりんごだ——しかしこの小僧め、どこから来たか、ゆだんがならないぞ」

と、つばをのみこんだり、目をむいたり。

高一は、敵兵と仲よしにならなければいけないと思い、一番おきいりんごをひとつとって、敵兵の手にのせてやりました。

敵兵は、おどろいた顔をしましたが、やがて、ポケットからお

金を出そうとしますので、高一は、いらぬいらぬとおしかえし、そして、早くたべろと手まねですすめました。

敵兵はりんごをたべると、きげんよくなりました。そこで、高一はトーチカの方へりんごを売りにゆきたいから、つれていってくれと手まねをし、またひとつりんごをやりました。

このよくばり敵兵はすっかりよろこんで、高一を、トーチカの方へつれてゆきました。

「おいみんな、うまいりんごを売りにきたぞ」

そういうと、中からどやどやと敵兵があらわれました。

りんごはうまいうえに、ねだんもたいへんやすいので大人気で
す。

ところがとつぜん、高一はうしろから大きい手で、かたをつかまれました。

「こら、小僧。口がきけないふりなどをしているが、あやしいやつ、お前は日本のスパイだろう」

高一が、ふりかえってみると、りっぱな敵の将校でした。それは、トーチカの隊長だったのです。

高一は、わざとかなしい顔をしてあやまりましたが、隊長は、しようちしません。そして、高一をひきずるようにして、トーチカの中の自分のへやにひっぱってゆきました。りんごはかごからおちて、そこらじゅうにごろごろところげました。

「さあ、こつちへはいれ。しらべてやる」

高一はもうこれまでと思い、腰の袋をあけて電氣鳩をだしました。そして、りんごのかごのなかにかくしてある、電氣鳩をうごかすきかいをひねりました。

電氣鳩は、ものすごい羽ばたきをして、隊長の頭の上をぐるぐるまわりだしました。

「おや、へんな鳥がとびだしたぞ」

隊長は、はらをたてて剣をぬくと、電氣鳩にきりつけました。

「あっ——」

ぴかり、といなびかりがみえたかと思うと、隊長は、その場にとおれました。電氣鳩のだした電氣にあたって死んでしまったのです。

その物音に、トーチカのおくから大ぜいの敵兵があらわれ、ピストルや、剣をもつて高一にむかつてきました。

「さあ、こうなればだれでもむかつてこい」

高一は、せめてくる敵兵めがけて電気鳩をとびかからせ、かたつぱしからたおします。じつにもものすごいいきおいです。さすがの敵兵も、手のくだしようがありません。

高一は、ころあいをみはからつて、軍用犬にひとつの大切な命令をつたえました。軍用犬は、まっていますとばかり、トーチカのおくめがけてかけだしました。そのいいつけはなんであつたでしょうか。

高一と、敵兵とのたたかいは、つづけられましたが、電気鳩に

は、とてもかかないません。そのうちに、犬がわんわんほえながらもどつてきました。

「おお、わかつたか。よしいこう。さあ、つれていっておくれ」

高一は電氣鳩をつれて、軍用犬のうしろからかけだしました。

「わん、わん、わん」

軍用犬は、ひとつのとびらの前で、しきりにほえています。しかし、そのとびらには大きな錠じょうがおりていて、あけることができません。

「そうだ、これは電氣鳩にたのもう」

高一は、電氣鳩を錠にぶつからせました。すると錠から、ぱちぱち火花がでたかと思うと、たちまちやけきれてしまいました。

高一は、とびらに手をかけてひきました。とびらはすぐあきま
した。

「ああ、あいた」

と、さげんで、高一は中にとびこみました。うすぐらいへやの
すみに、ひげぼうぼうの日本人が手をしばられていました。

「あつ、お父さまだ」

高一はなみだとともにかけよりました。

「おお、お前は——お前は高一か！」

秋山技師は、よろよるとたちあがつて、高一にからだをすりつ
けました。あまりの思いがけなさに、またあまりのうれしさに、
あとはなみだばかりで言葉もできません。

「さあお父さま。すぐここをにげましょう」

「ああ高一、それはだめだよ。敵兵にみつかつてころされるばかりだ」

「お父さま、大丈夫ですよ。ぼくは電氣鳩をもっているんですから」

「えっ、電氣鳩……」

「そうです。電氣鳩さえあれば、どんな大敵がきてもだいじょうぶです。さあはやくにげましょう」

高一が、父秋山技師をつれてトーチカを出たとき、ちょうどそこへ、大石大尉が陸戦隊をひきつけてかけつけました。大尉も決死のかくごで、中の島へせめこんできたのです。しかし、敵は電

気鳩にやられてよわりきっていましたので、わけなく上陸できた
そうです。

「高一君、じつにりっぱなはたらきをしたね、おめでとう。み
なでばんざいをとなえよう」

トーチカの上に日章旗をたてると、大尉のおんどで、陸戦隊や、
高一やお父さままで力いっぱい、ばんざいをさげびました。

むこう岸にまつていたミドリが、どんなによろこんだか、申す
までもありません。

電気鳩をうごかすふしぎなしかけは、秋山技師がしらべて、す
っかりわかり、大へんめずらしいというので、いまも大切にしてい
るそうです。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第4巻 十八時の音楽浴」三一書房

1989（平成1）年7月15日第1版第1刷発行

初出：「幼年倶楽部」大日本雄弁会講談社

1937（昭和12）年8月～1938（昭和13）年4月

※「羽ばたき！」と「海岸だ！」の二箇所のみでは、「！」は斜体となっています。

入力…tatsuki

校正…まおや

2005年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

電気鳩

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>